



物が物を 呼ぶ

川崎ゆきお

「物は物を求めますなあ。妖刀村正は血を求めますなあ」

「それは物騒な」

「欲は欲を求める。欲が欲を呼ぶ」

「よく聞きますねえ」

「ある物を得ても、その物が、また物を欲しがる」

「物欲ですか」

「あらゆる欲ですよ。まあ、人は欲の塊。それを隠すような仕掛けもありますが、これは我慢をしているだけで、後が怖い。溜りに溜まった欲が爆発するので、たまにはガス抜きのように、欲を出すのがよろしいかと」

「物が欲を呼ぶのですか？ それは欲張りな人で、人が欲を呼ぶんじゃないのですか」

「物に託した自分が物の中におわします」

「神様みたいに、おわすわけですね」

「そうです。物と自分とが一体になることがあるでしょ。まあ、人と物とは違いますが、思い入れのようなものが加わるはず。自分の人格や生き方を物の中に見いだすわけですから、ただの物じゃない」

「それで、物が物を呼ぶのですか」

「まあ、お金の都合もあるので、物が物を呼んでいても、買えないこともあります。お金があっても、買うことができても際限がない。いつまでも物は物を呼び続けます」

「どこで止めるのですか」

「まあ、諦めるのでしょうかなあ」

「物を諦めるとは、欲を諦めると」

「しかし、その欲は別の方面へ向かうでしょう。欲はエネルギーですからね。それを出せば、まあ、何とか誤魔化せますよ」

「どちらへ向かうのですか」

「目先を変えて、別の物に欲を出すとかです」

「それなら、お金がなくてもできますねえ」

「まあ、いくらお金があっても満足は得られません。だからそれを止める方法が古代からあるのです。初期、それは宗教でしょう。またはタブーです。タブーを作ることで、歯止めを効かせる」

「神々の深き欲望って聞きますが」

「神は人が作ったもの、だから、人以上に神様は欲深い」

「でも、欲を押しえるために作ったのでしょ。タブーとか宗教は」

「神様はいいのです。作り物ですから。欲の塊でね。ここで人は神を利用したわけです。大きな方便でしょう」

「神は際限なく欲を出してもいいのですね」

「欲を鎮める者が一番の欲張りってことですよ」

「それより、新しいタブレットが欲しいのですが」

「銘板ですか。石版に預言や啓示とかが刻まれていたり」

「はあ」

「石などに刻まれた」

「違います。パソコンです」

「あなた、先月買ったんじゃないのですか」

「タブレットがタブレットを欲しました」

「え」

「7インチなんです、8インチが欲しい」

「おお」

「7インチが8インチを求めたようです」

「それはあなたが求めたのでしょ」

「正に物が物を求めるのです」

「知らぬがな」

了